

IIAS塾ジュニアセミナーテキスト  
(VOL. 02023)

未来に向かう人類の英知を探る  
— 時代の裂け目の中で、人々は何に希望を見出してきたか —

(政治・経済分野)

二宮尊徳に学ぶ  
～ 災害多発時代を生き抜く知恵と力 ～  
— <sup>おの</sup>自ずから (天道) と  
<sup>みづか</sup>自ら (人道) の交響 —

公益財団法人国際高等研究所  
IIAS塾「ジュニアセミナー」開催委員会

本テキストは、2018年8月27日開催の第62回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所 I I A S 塾「ジュニアセミナー」開催委員会が編集・制作したものです。本テキストの無断転載・複写を禁じます  
※本テキストは、2019年夏季「IIAS 塾ジュニアセミナー」のメインテキストとして使用されたものである。

## 未来に向かう人類の英知を探る

－ 時代の裂け目の中で、人々は何に希望を見出してきたか －

# 荒廃農村地域の再生に生涯をかけた 「二宮尊徳」の信念と信仰

二宮金次郎（1787 - 1856）は「災害の子」である。天明大飢饉の渦中に生れ、天保大飢饉を生き抜き、安政3年に死去した。子供の頃、酒匂川（神奈川県小田原市を流れる）の氾濫で家と田畑を失い、14歳で父親、16歳で母親を亡くし、一家離散の憂き目を見た。だが、その困窮の中で、家を復興し、村（栢山村）を復興し、藩（小田原藩）を復興し、幕府領の復興をも果たした。ある夏前に茄子の味が秋の味になっているので、その夏が冷夏となることを予知し、粟や稗を植えて備えをしたら、天保の大飢饉となった。茄子の味一つで天保の大飢饉を予知し、適切な対策を講じて被害を最小に食い止め、小田原藩では餓死者を一人も出さなかったという。その鋭い観察と経験によって正確に災害や災難（天災・人災）を予測し、それに明確な対策を立てて実行に移し、人々の苦難を救った。その二宮尊徳の人生と行動と信仰は未来へのさまざまなヒントとメッセージを秘めている。

## 鎌田東二（Toji KAMATA）

1951年、徳島県生れ。國學院大學大学院文学研究科博士課程神道学専攻単位取得満期退学。岡山大学大学院医歯学総合研究科博士課程社会環境生命科学専攻単位取得退学。現在、上智大学グリーンケア研究所特任教授。京都大学名誉教授。天理大学客員教授。博士（文学・筑波大学）。宗教哲学・民俗学・日本思想史・比較文明学専攻。石笛・横笛・法螺貝奏者。神道ソングライター。フリーランス神主。吟遊詩人。

著書『神界のフィールドワーク』（青弓社）『聖地感覚』（角川ソフィア文庫）『神と仏の精神史』『現代神道論』『世直しの思想』『天河大辨財天社の宇宙～神道の未来へ』『悲嘆とケアの神話論―須佐之男と大国主』（ともに春秋社）『神道とは何か』『日本人は死んだらどこへ行くのか』（ともに PHP 新書）『世阿弥』『言霊の思想』（ともに青土社）、詩集『常世の時軸』（思潮社）『夢通分婉』『狂天慟地』『絶体絶命』『開』（ともに土曜美術社出版販売）。



## 目次

### はじめに 一 自然災害の多発する日本列島

- ア 水を神として崇める国で頻発する水の災害
- イ 「くらげなす漂へる国」に生きるということ

### I 二宮尊徳の事跡を辿る

- (1) 二宮尊徳は「災害の子」
- (2) 二宮尊徳の発想の原点 一 「神儒仏」習合的宗教観
  - ア 「至誠」「勤勉」「分度」「推譲」の道を唱道
  - イ 「天道」と「人道」の区別を重視
  - ウ 「天地を以て経文とする」の考えの下に「積小為大」を実践
- (3) 尋常小学校唱歌の歌詞に詠い込まれた二宮尊徳の姿

### II 二宮尊徳の時代における世界と日本

- (1) 世界異常気象と江戸の「四大飢饉」
  - ア 異常気象下で多発する災害への対応
  - イ 二宮尊徳が編み出した地域再生の原理
- (2) 世界と日本における近代社会思想の潮流
  - ア 西洋における近代社会思想の誕生と展開
  - イ 日本における近代社会思想の誕生と展開
- (3) 江戸時代における社会思想と文化
  - ア 官学としての朱子学、それに対する民間儒学
  - イ 平和な江戸時代に繁栄する町人文化と修養道徳
  - ウ 江戸から明治へと継承・発展した社会思想
  - エ 内村鑑三『代表的日本人』で評価される二宮尊徳

### III 二宮尊徳の生涯とその年譜

- (1) 二宮尊徳の生涯 一 「報徳仕法」の完成
- (2) 読書と観察と思索 一 読書による基礎学問と経験による学び
- (3) 道徳心を核とする「報徳仕法」の実践

### IV 二宮尊徳の思想 一 基本理念と体系

- (1) 基本理念 一 「天道」と「人道」の区別を知って「人道」を尽くす
  - ア 誠の大道 一 「神道」「仏教」「儒教」の習合
  - イ 持続可能社会のための四原則 一 「至誠」「勤勉」「分度」「推譲」
- (2) 体系 一 思想の根幹は、「輪廻」

おわりに

質疑応答

次代を拓く君たちへ — 鎌田東二からのメッセージ —  
—表現と学問—

2018年8月27日開催

第62回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：荒廃農村地域の再生に生涯をかけた「二宮尊徳」の信念と信仰

講演者：鎌田東二（京都大学名誉教授）

はじめに ー 自然災害の多発する日本列島

ア 水を神と崇める国で頻発する水の災害

2018（平成30）年8月24日、NHKのニュース番組で、京都東山区の大將軍神社の拝殿が倒壊したという報道があった。台風20号による災害である。その8年前、2011（平成23）年3月11日14時46分、東日本大震災が起これ、大きな津波によって数万人の方々の方が亡くなり、数十万以上の家屋等様々な施設が倒壊し飲み込まれた。

その日その時、私は那智の滝の前にいた。翌日、新宮市で、市民参加で「熊野学」を切り拓こうというテーマのシンポジウムが開催されることになっていた。そこで熊野三山を参拝してから催しに参加したいと思い、前日入りして、その3月11日の午後2時過ぎに那智の滝の前に佇んでいたわけである。その時、東日本大震災が起きていたことは、後から報道で知った。一方では那智の神と崇められている水が、もう一方では破壊者となっていたのである。

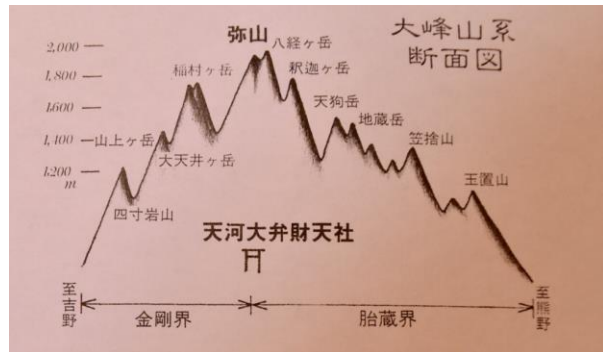
そして同時に、たくさんの神社や仏閣が避難所や緊急救済施設になっていた。岩手県野田村の愛宕神社の周辺は、鳥居の数百メートル先が海岸で、その数百メートルの間の家屋がほとんど全滅したが、鳥居から上は難を逃れた。この愛宕神社の階段の下から5メートルくらいのところまで津波が押し寄せ、周辺は水浸しになったが、家屋はさらわれなかった。この地域の方々には神社に駆け上がって助かった。さらに、その近くに海蔵院という曹洞宗の大きな寺があり、その寺で避難所生活をした。二宮尊徳（以下尊徳と表記）も神道や仏教、儒教を重要視していた。ここでは神社と寺が緊急時の救済施設になった。今、尊徳が生きていたら、この事実を大切にしながら、日本文化の根幹は何で、それをどう使うべきかを提言したのではないかと思う。

また、奈良県吉野郡天川村坪内にある天河大辨財天社も、この半年後の2011年9月に水没状態になった。ここは大神神社の南に位置し、さらに南に行くと熊野三山がある。天河大辨財天社は、なぜ水没状態になったのか。神社の社殿は10メートルほど上がった丘にあるので水没しなかった。しかし、下にある社務所は天井辺りまで水が来た。これは、傍を流れる川が神社の周囲で4箇所も90度に曲がっていることが原因である。尊徳ならこれを



二宮尊徳 (1787-1856)  
Public domain,  
Wikimedia Commons

真っ直ぐの河川に修復したかもしれない。しかし、ここは聖域なので地形を簡単には変えられない。そうは言っても曲がっていて危ないのは事実である。天河大辨財天社は、小盆地から大盆地へと何重にもなって全体が大きな盆地になっているところである。近畿の山脈で2番目に高い弥山(標高 1,895 メートル)の麓の標高 800 メートルくらいのところに里宮をつくった。傍を流れる天ノ川は、途中から十津川、熊野川と名前を変えて熊野灘に流れ出る。その天ノ川と弥山川が神社の近くで合流している。そのような地形において、深層崩壊による土砂崩れが 3 箇所でき、堰き止められた川の水位が上昇した。一方では堰のようになって水が逆流し、さらに、もう一方の弥山川の方も土砂崩れで水位が高まっていた。それがぶつかって、三つ巴の渦巻になった水が山を越え、史上類を見ない大被害になった。



スーパー・サイキック・スポット『天河』より  
柿坂神酒之祐(監修) 扶桑社

吉野から熊野に通じる一本道は、200 箇所ほども土砂崩れがあった。道を修復して再び通れるようになるまでに半年かかった。神社の鳥居も土砂崩れ状態になった。修験道の拠点であり、水の神を祀る神仏習合のこの重要な社が、このような水の被害を受けたのは、東日本大震災のちょうど半年後だった。

この時は、那智の滝も被害を受けている。大水害による土砂崩れで、那智大社の社殿の裏戸のところまで土砂が流れてきて、もう少し土砂崩れが大きければ完全に社殿そのものが飲み込まれていたという状態だった。この災害では勝浦町の町長も亡くなっており、大きな人的被害もあった。

しかしながら、那智の滝は、日本の自然崇拜の対象となり、飛瀧権現として崇められ、同時に神仏習合の那智大社・青岸渡寺は西国三十三所一番札所として、観音様の信仰を強く持ってきたところである。この観音様信仰では、ここから観音様の浄土の補陀落へ渡海上人が補陀落渡海をするという信仰と習慣が中世頃からあった。したがって、那智の滝は御神体でもあり、神社と仏塔と鳥居のある神仏習合の重要施設として、今日まで熊野三山の一角にあって伝統を誇っている。

このような文化の持っている底力に対して、尊徳であれば、日本の文化の大切な部分として、それをどう活かすかという発想を持ったと思う。

他方では、2014 (平成 26) 年 9 月 27 日に御嶽神社のある御嶽山が大噴火を起こし、57 名の方が亡くなり、6 名が行方不明になるという戦後最大の人的被害を出した災害もあった。

## イ 「くらげなす漂へる国」に生きるということ

なぜ、このように自然災害が多いのか。それは、日本が 4 枚ものプレートが重なる世界に類例を見ない漂流列島だからである。昔、NHK で「ひょっこりひょうたん島」という

人形劇が放送されていたが、まさに日本列島は漂流島で、712（和銅5）年に編纂された古事記<sup>1</sup>はそれを称して「くらげなす漂へる国（くらげのように漂っている国）」と言っている。そのために地殻変動が起りやすい。プレートが重なっているところに日本海溝や南海トラフやフォッサマグナ等があるので、間違いなく噴火や地震による津波など、いろいろな災害が多発することになる。つまり、自然災害の起りやすいところで生きていかなければならない。そのためにこうした自然災害に打ち勝っていく知恵と力と生き方を身に付けなければならない。そういうことを古事記の時代から考えて実践してきたわけである。

かつて日本は「大八島国」と呼ばれ、たくさんの島々が重なる島嶼列島である。そこに稲作が入って来て「豊葦原瑞穂国」<sup>とよあしほらみずほのくに</sup>、平たくは「葦原中国」<sup>あしほらのなかつくに</sup>と呼ばれた。しかし、その根本はくらげのように漂っている「くらげなす漂へる国」ということで、古事記には「大八島の国」という名称を加えて、四つの国の名前前で表されている。

そして、中央構造線とフォッサマグナの交わる辺りに諏訪大社<sup>2</sup>が建っている。そういう意味では、まさに諏訪大社は日本の臍に当たると言えるし、ここに御柱を建てて支えていくという文化的発想が生まれてきたのかもしれない。

また、伊豆から北上する火山のラインや、東西南北に弓なりに続いていく中央構造線とも連絡する火山等、日本は111もの活火山のある火山列島である。つまり、地上は噴火するし、海底はプレートで地震等の地殻変動が起きるし、自然災害が多発する地帯である。近年それが一層増加している。東日本大震災の後も想定外の大豪雨、大洪水、大型台風、竜巻、噴火が続いており、我々は100年に1回、1000年に1度とか観測史上初というような未曾有の災害に見舞われているわけである。

しかし、今の文明の構造は、大量生産大量消費社会の成長イデオロギーの中にあるので、新しい生き方や文明の構造をどう再構築するか、リノベートできるか等々は、まだまだ手探り状態である。そのような災害多発時代に、どのような生き方、社会のあり方が可能なのかということを、尊徳の思想と実践から探っていきたい。

## 1 二宮尊徳の事跡を辿る

### (1) 二宮尊徳は「災害の子」

二宮尊徳（本名：二宮金次郎）は「災害の子」である。「天明の大飢饉」の渦中に生まれ、「天保の大飢饉」を生き抜いて、安政の大獄があった1856（安政3）年、幕末近くに亡くなった。子どもの頃に酒匂川の氾濫で家を流され、田畑も失った。14歳で父親、16歳で母親を亡くし、一家離散という苦難の中で、ひ弱な少年ではあったが、長男として一家を支えていくために悪戦苦闘した。

困窮の中で、家の復興、村の復興を果たし、さらには、譜代大名として一般によく知ら

<sup>1</sup> 古事記は、日本最古の歴史書。太安万侶が編纂し、元明天皇に献上された。

<sup>2</sup> 諏訪大社は、長野県の諏訪湖の周辺に4箇所の境内地をもつ神社。信濃國一之宮。神位は正一位。



れている大久保彦左衛門<sup>3</sup>忠教の兄の大久保忠世の系統が継ぎ、幕藩体制にとって重要な藩の一つだった小田原藩を復興し、幕府の日光領の建て直しも行った。

一家の復興、村の復興、藩の復興、幕府領の復興を果たした結果、尊徳は600ほどの村々から相談や依頼を受け、その立て直しに様々なアドバイスをを行った。

適切な対策を講じて、被害を最小に食い止めるような活動をケースバイケースで行った。さらに、鋭い観察や経験によって正確に災害、災難をも予測した。これは単なる直感ではなく、ある種の経験科学的な独自の観察によって、起こりそうなことを未来予測し、それに対してどのような解決の道があるかを考え実行に移して、人々の苦難を救った。

## (2) 二宮尊徳の発想の原点 — 「神儒仏」習合的宗教観

### ア 「至誠」「勤勉」「分度」「推譲」の道を唱道

尊徳の発想の基になったのが『論語』『大学』などの「四書五経<sup>4</sup>」である。二宮尊徳はこの「四書五経」を繰り返し読んでいる。今我々は、インターネットや本などから多くの情報を得ては知識の量を誇り、たくさん知っていることが知的な能力の一つと数えられているが、尊徳は「読書百遍義自ずから通ず」を実践して、百遍、二百遍、五百遍、千遍と繰り返えし『論語』や『大学』を読むことで、そこにある原理、思考の原型、そしてその応用までできるような基礎訓練をしていたのである。つまり、基本的、原型的なことを知るによって応用能力を付けていったのである。

「四書五経」を独自の洞察を持って読み抜き、神道、儒教、仏教の三教の習合的な包括的宗教観を創り上げていった。それは、前述のように神社を大事にし、神道を根本に置いて、その上に儒教や仏教が入って来ると考えて、神道を2分の1として、残りの2分の1ずつ、つまり全体の4分の1ずつを儒教と仏教とし、この配分を間違っってはならないと考えた。そうした考えの下で、「至誠」の道、「勤勉」の道、「分度」の道、「推譲」の道を生活の基本的な構えとし、自ら実践しながら説いていった。

### イ 「天道」と「人道」の区別を重視

尊徳は、「天道」と「人道」との区別を重んじている。老荘思想は「無為自然」として、自然のまま、天然のままであることを重視した。「大道廢れて仁義あり」という老子の言葉もある。この「仁義あり」とは人倫の道を示している。尊徳は、こうした考えを踏まえつつ、いわゆる天理のままでは荒地になる。例えば、庭がきれいなのは、数箇月に一度手入れをしているからであり、同じように我々の身の周りには人間の手入れが必要で、そのままにしておくと雑草が繁茂してしまう。田畑もそうであり、至るところがそうである。したがって、「天道」はそのまま放置しておく、様々な生き物が棲息で

<sup>3</sup> 大久保彦左衛門 (1560-1639<永禄3 - 寛永16>) : 江戸初期の幕臣。家康・秀忠・家光の三代に仕える。

<sup>4</sup> 四書五経は、儒教の経書の中で特に重要とされる四書（「論語」「大学」「中庸」「孟子」）と五経（「易経」「書経」「詩経」「礼記」「春秋」）の総称。

きても、人間が生きられるような環境ではなくなってしまう。つまり、「人道」が必要で、人の手が加わらなければならない。つまり、「人道」「人為」「人造」が極めて重要になる。当たり前のことだが、その当たり前のことを重視した。

#### ウ 「天地を以て経文とする」の考えの下に「積小為大」を実践

「天地を以て経文とす」の考えの下に自然から学ぶ精神を持ちながら、一方で、小さなことを積み重ねて大を為すという人の道「積小為大」を説いている。小さいことの積み重ねが大きなことを成し遂げる根本であって、その理を知った時に様々な豊かさも生まれてくるというものである。

道徳的な、人の心のあり方、生き方として、誠を尽くし、勤勉に働き、自分の分限を守り、子孫や他者のために蓄えたものを譲って分け合う。これが「至誠」「勤勉」「分度」「推譲」の意味である。尊徳は、そういう四つの人倫の徳を実践し、皆と相互シェアしていく、シェア・ソサエティ＝共有社会のようなものを構想して実践した。そういう態度を貫いていくと、自分の家も村も復興して、富と社会的豊かさと平和を得ることができる。そのようにして家も村も藩も国も世界も豊かにすることができるという確信の下に、計画的に実践していった。

そこで重要なのは、経済は数値化できるが、倫理や生き方は数値化できないということである。金銭であれば、この時代なら十両、百両と数値化することができる。しかし、心のあり方や生き方そのものは量に換算できない。そういう経済という数値化できるリアルなもの、倫理や生き方など人間の心に基づいて成立する行動規範を結び付ける。言行一致的な観点から言えば当たり前のことだが、それを実現するのは至難の業である。それを尊徳は行った。

#### (3) 尋常小学校唱歌の歌詞に詠い込まれた二宮尊徳の姿

尊徳の姿は、1911（明治44）年に尋常小学校唱歌が作られた時、その歌詞に詠い込まれた。「柴刈り縄ない草鞋をつくり／親の手を助け弟を世話し／兄弟仲よく孝行つくす／手本は二宮金次郎／骨身を惜まず仕事をはげみ／夜なべ済まして手習読書／せわしい中にも撓たがまず学ぶ／手本は二宮金次郎／家業大事に費ついでをはぶき／少しの物をも粗末にせず／遂には身を立て人をもすくう／手本は二宮金次郎」という歌詞だった。

かつては、倫理・道徳の手本とされていたが、戦後は封建道徳のように捉えられ、古い生き方、封建的な倫理徳目と判断されたのか、取り上げられなくなり、また、尊徳の銅像も小中学校から次々と撤去された。そのような状況を目にしても別段不思議には思わなかったが、今もう一度、その生き方を学ぶことも必要と思われる。

## II 二宮尊徳の時代における世界と日本

### (1) 世界異常気象と江戸の「四大飢饉」

#### ア 異常気象下で多発する災害への対応

江戸時代に、「寛永の大飢饉」、「享保の大飢饉」、「天明の大飢饉」、「天保の大飢饉」の四つの飢饉が起こった。これは気象状況が影響しており、17世紀には小氷河期と言われるマウンダー極小期<sup>5</sup>があり、この時、ロンドンのテムズ川も凍ったくらいの寒冷状態になった。また、ペストが流行ったが、そのような状況の中で大きな産業変化が起こった。デカルト<sup>6</sup>やニュートン<sup>7</sup>のような人たちが登場し、近代科学や近代システムが生まれてきたのは、その困難な時期であった。

17世紀から19世紀にかけて、寒冷化による飢饉が起こった。「寛永の大飢饉」の時は三代将軍徳川家光、「享保の大飢饉」の時は八代将軍徳川吉宗<sup>8</sup>、「天保の大飢饉」の時は水野忠邦<sup>9</sup>等の改革者が登場し、何とか大飢饉を乗り越えようと改革を試みた。それらが全部成功したわけではないが、飢饉を乗り越えるためにいろいろな方策が提起された中で一番重要なのは節約、儉約だった。つまり、基本は財政を縮小すること、支出を減らすことであり、もう一つは、開墾等をして産業を拡大することであり、これが二大改革であった。それとともに、節約や産業のリノベーションを引き起こすために、尊徳が重視したのは『論語』や『大学』の持っている人間の生き方に関わる心のあり方だった。

#### 江戸時代の四大飢饉

名称	時期	被害の中心地	当時の将軍	原因
寛永の大飢饉	寛永19(1642)年 -寛永20(1643)年	全国(特に東日本日本海側の被害が大)	徳川家光	全国的な異常気象(大雨、洪水、早魃、霜、虫害)
享保の大飢饉	享保17(1732)年	中国・四国・九州地方の西日本各地、特に瀬戸内海沿岸一帯	徳川吉宗	冷夏と虫害
天明の大飢饉	天明2(1782)年 -天明7(1787)年	全国(特に東北地方)	徳川家治	浅間山、アイスランドのラキ火山等の噴火とエルニーニョ現象による冷害
天保の大飢饉	天保4(1833)年 -天保10(1839)年	全国(特に東北、陸奥国・出羽国)	徳川家斉 徳川家慶	大雨、洪水と、それに伴う冷夏(稲刈りの時期に雪が降ったという記録がある)

<sup>5</sup> マウンダー極小期は、1645年から1715年の太陽黒点数が著しく減少した期間の名称。

<sup>6</sup> デカルト(René Descartes、1596-1650)：フランス生まれの哲学者、数学者。合理主義哲学の祖であり、近世哲学の祖として知られる。

<sup>7</sup> ニュートン(Isaac Newton、1642-1727)：イングランドの自然哲学者、数学者、物理学者、天文学者、神学者。

<sup>8</sup> 徳川吉宗(1684-1751<貞享元-寛延4>)：江戸幕府第8代将軍。将軍就任以前は越前国葛野藩主、紀州藩第5代藩主を務めた。

<sup>9</sup> 水野忠邦(1794-1851<寛政6-嘉永4>)：江戸時代後期の大名・老中。肥前唐津藩主、のち遠州浜松藩主。

## イ 二宮尊徳が編み出した地域再生の原理

農村地域の荒廃は、その背景を考えると、災害による荒廃、人口減少による荒廃、経済基盤を失ったための荒廃等がある。つまり、モノ・ヒト・カネ・コミュニティが連動しながら、次第に農村社会が成り立たなくなっていくことにある。

尊徳は、自分の家を酒匂川の氾濫で無くし、家が荒廃してしまった。それを再生し、その再生を地域や国にまで拡大した。そこにあった再生の原理が、前述の四つの徳目（「至誠」「勤勉」「分度」「推譲」）である。

尊徳は、幕末期の災害多発時代に、災害や飢饉に苦しむ中で一家離散し、そこから様々な立て直し、復興を行い、その復興の方法論を「報徳仕法」という誰もが参照できるものにまとめ上げた。その影響を受けたのが、渋沢栄一、豊田佐吉等である。明治時代に新しい産業を起し、推進した人たちに、尊徳の方法論や実践は多大な影響を及ぼした。

## （2）世界と日本における近代社会思想の潮流

### ア 西洋における近代社会思想の誕生と展開

この時代に、西欧は近代社会に発展していく。尊徳の生きた時代にほぼ近いのは、ルソー<sup>10</sup>、イマヌエル・カント<sup>11</sup>、ヘーゲル<sup>12</sup>、シェリング<sup>13</sup>、マルクス<sup>14</sup>等で、このような人たちが自由、平等、博愛などフランス革命<sup>15</sup>を引き起こす根本原理、あるいは、ドイツの観念論<sup>16</sup>哲学といわれるものを作り上げる。あるいは、ヘーゲルの弟子筋に当たるマルクスが、ヘーゲル的な弁証法を唯物弁証法<sup>17</sup>に転換し、人間にとって、社会にとって最も根本的なものは下部構造であり経済だという、そのような経済原則を人間社会の原点に据えることによって、共産主義や社会主義革命を目指した。『共産党宣言』<sup>18</sup>を出したのが1848（弘化5、嘉永元）年で、尊徳が亡くなる頃だった。

### イ 日本における近代社会思想の誕生と展開

この頃、日本ではどういう人々が生きたのか。『共産党宣言』が出された1848年頃、尊

---

<sup>10</sup> ルソー（Jean-Jacques Rousseau、1712-1778）：主にフランスで活躍した[1]哲学者、政治哲学者、作曲家。

<sup>11</sup> イマヌエル・カント（Immanuel Kant、1724-1804）：プロイセン王国（ドイツ）の哲学者。『純粋理性批判』、『実践理性批判』、『判断力批判』の三批判書を発表し、批判哲学を提唱。

<sup>12</sup> ヘーゲル（Georg Wilhelm Friedrich Hegel、1770-1831）：ドイツの哲学者。ドイツ観念論を代表する哲学者のひとり。

<sup>13</sup> シェリング（Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling、1775-1854）：ドイツの哲学者。ドイツ観念論を代表する哲学者のひとり。

<sup>14</sup> マルクス（Karl Heinrich Marx、1818-1883）：ドイツ・プロイセン王国出身の哲学者、思想家、経済学者、革命家。

<sup>15</sup> フランス革命（1789-1799）は、フランスで起きた市民革命運動。この革命によって、王が絶対的権力を有した絶対君主制時代と、それまでの封建的体制が崩壊した。

<sup>16</sup> 観念論は、カント以後、19世紀半ばまでのドイツ哲学の主流となった思想。フィヒテ、シェリング、ヘーゲルによって代表される。

<sup>17</sup> 唯物弁証法は、弁証法的に運動する物質が精神の根源であるという考え方。カール・マルクスによって定式化された歴史発展の法則である唯物史観の哲学的根拠となった。

<sup>18</sup> 共産党宣言は、マルクス、エンゲルスが共同執筆して、ロンドンで出版した「共産主義者同盟」の綱領。

徳は最晩年を迎えていた。尊徳は、農本主義的社會主義のような考え方を持っていたと思われる。どのようにしてより共同性を高くするのか、今で言う公共的な政策を、最も意識的、実践的に展開した。

ここで取り上げたいのは、19世紀の日本人として日本の国家構造改造計画的なものを立てた佐藤深淵<sup>19</sup>、国学者で復古神道を立ち上げ、明治維新のイデオログの一人にもなった平田篤胤<sup>20</sup>、神道系の新宗教の黒住教を切り拓いた黒住宗忠<sup>21</sup>である。そういう人たちが生まれた数年後、あるいは10数年後に尊徳は生まれている。

京阪神で言えば、天理教の開祖である奈良の中山みき<sup>22</sup>が生まれる数年前に尊徳は生まれているが、中山みきもこの時代に苦しんでいる人々を神の力でどう救済するかという宗教的な実践をした人である。

少し遡ると、米沢藩主の上杉鷹山<sup>23</sup>、寛政の改革を行った松平定信<sup>24</sup>、天保の改革を行った水野忠邦等の老中が生きていた時代となる。

尊徳の生きていた時代の後半生は、ロシアをはじめとして様々な異国船が来て、1825（文政8）年に異国船打払令が発令され、天保年間の1835（天保6）年にハレー彗星が接近し、1833（天保4）年から6年にわたって「天保の大飢饉」が起こった。そしてこの頃、1837（天保8）年に大塩平八郎の乱<sup>25</sup>が勃発し、大坂でも社会が大きく揺れ動いた。

災害の渦中に生まれ、災害と共に生き、災害の中で死んだ尊徳の生き方、思想、行動は、現代社会あるいは未来社会に対する様々なヒントやメッセージを秘めている。そういう意味からも、今、その生き方や思想、行動を活かした「金次郎ルネサンス」が必要とされる。

### （3）江戸時代における社会思想と文化

#### ア 官学としての朱子学、それに対する民間儒学

江戸時代には、藤原惺窩<sup>26</sup>、林羅山<sup>27</sup>、伊藤仁斎<sup>28</sup>、石田梅岩<sup>29</sup>、二宮尊徳など独自の儒学者が登場している。

---

<sup>19</sup> 佐藤深淵（1769-1850）：江戸時代後期の絶対主義的思想家であり、経世家（経済学者）、農学者、兵学者、農政家でもある。本業は医師。

<sup>20</sup> 平田篤胤（1776-1843<安永5-天保14>）：江戸時代後期の国学者・神道家・思想家・医者。

<sup>21</sup> 黒住宗忠（1780-1850<安永9-嘉永3>）：神道系の新宗教のさきがけとなる黒住教を開いた幕末の神道家。

<sup>22</sup> 中山みき（1798-1887<寛政10-明治20>）：日本の宗教家、天理教教祖。

<sup>23</sup> 上杉鷹山（1751-1822<寛延4-文政5>）：江戸時代中期の大名。出羽国米沢藩9代藩主。

<sup>24</sup> 松平定信（1787-1793<宝暦8-文政12>）：江戸時代中期の大名、老中。陸奥白河藩第3代藩主。

<sup>25</sup> 大塩平八郎の乱は、大坂（現・大阪市）で大坂町奉行所の元与力大塩平八郎（中斎）とその門人らが起こした江戸幕府に対する反乱。

<sup>26</sup> 藤原惺窩（1561-1619<永禄4-元和5>）：戦国時代から江戸時代前期にかけての儒学者。

<sup>27</sup> 林羅山（1583-1657<天正11-明暦3>）：江戸時代初期の朱子学派儒学者。

<sup>28</sup> 伊藤仁斎（1627-1705<寛永4-宝永2>）：江戸時代の前期に活躍した儒学者・思想家。

<sup>29</sup> 石田梅岩（1685-1744<貞享2-延享元>）：江戸時代の思想家、倫理学者。石門心学の開祖。

藤原惺窩は冷泉家の生まれ、藤原定家の家系であり、臨済宗の僧から儒学者になった最初の人である。その弟子が林羅山で、これらの人たちは、官学としての朱子学の「居敬窮理<sup>30</sup>」の倫理を持って幕藩体制の倫理的礎を築いた、官学の中心メンバーである。

それに対して、儒学を人倫の道として独自に民間儒学を切り拓いたのが、京都の伊藤仁斎、亀岡出身の石田梅岩、それから小田原の二宮尊徳である。これらの人たちは儒教の一番の根本構造は愛や思い遣りにあるとした。梅岩は石門心学<sup>31</sup>をつくり、商人も購買者も消費者も共に栄えていくという商人道の倫理実践を説いた。このようにして、官学である朱子学と異なる民間儒学が、江戸時代中期以降に発展していく。

最初に登場したのは管理と務めの朱子学であり、幕藩体制を管理する中で、どのように忠孝の精神で務めを果たすかという点にポイントがあった。そのように、より形式的なものが朱子学である。それに対して、知ることと行動を一致させる、より実践的、実学的なありようを求めたのが陽明学である。そして、生活の意味づけと開拓などを新たに進めていく民間儒学的な発想で、それを実践的倫理道徳的かつ合理的に説いたのが尊徳であり、石門心学の石田梅岩であった。この2人が民間儒学の双壁である。

## イ 平和な江戸時代に繁栄する町人文化と修養道徳

江戸時代は平和な時代でもあった。なぜなら、元々は戦士であった武士が、参勤交代という制度の中で官僚のようになっていったからである。つまり、現在の日本の官僚機構が優秀であるとするならば、江戸時代の武士の生活形態にその蓄積基盤があったと考えられる。

参勤交代は江戸時代を貫く代表的な社会統合儀礼であり、毎年4月に自分の領地から江戸に行って将軍と面会し、最敬礼を表さなければならない。そのため、道中の宿場が発達し、道が整備された。何百人も移動するので、宿泊する所も高級な宿から足軽が泊まる安い宿までいろいろな設備が必要になる。食べ物も高級なものから普通のものまでいろいろなメニューを用意しなければならない。交通網も中央から地方へと陸路も航路も発達する。例えば、NHKの大河ドラマ「西郷どん」で言うと、斉彬<sup>32</sup>は江戸で生まれたが、藩主として国元と江戸を往復していた。そういう意味で江戸時代は、参勤交代という、中央の文化と地方の文化がダイレクトにつながり、日本のインフラ整備という観点からも非常に重要なシステムを持ったと言える。

そういう中で、町民の文化も栄えていく。その時の倫理徳目、倫理実践を石田梅岩等が率先して提唱し、尊徳は「報徳思想」を農民の暮らしの中から説いていった。そのように、災害は多かったけれども、政治的には平和な時代であり、様々な技能の習得や修養道

<sup>30</sup> 居敬窮理は、朱子学が唱える学問修養の根本的方法。

<sup>31</sup> 石門心学は、江戸時代中期に石田梅岩を始祖として、庶民、とりわけ町人にその生の意味を教えた思想および教化運動。

<sup>32</sup> 島津斉彬（1809-1858<文化6-安政5>）：江戸時代後期から幕末の大名で、薩摩藩の第11代藩主。島津氏第28代当主。

徳が発展し、次の時代の下準備にもなった。

#### ウ 江戸から明治へと継承・発展した社会思想

江戸時代において、世の中を平安に保つために、神道的な新しい仕組みとして日光東照宮<sup>33</sup>がつくられ、その神を東照大権現として創建すると同時に、各藩主の神社が創建された。このことが藩の権威や権力を成り立たせていく重要な要素となった。

しかし、仏教は中世のように独自の活動ができなかった。寺請制度<sup>34</sup>の中で幕藩体制を支える秩序の中に組み込まれ、仏教の新しい実践としては弱体化した。

そこで、仏教に代わる新しい学問としての儒教が、儒学として導入された。それが官学儒学の朱子学である。そして、それが実践的な陽明学や民間の石門心学等にまで様々に発展していった。

そういう影響下で、新たに日本独自の文化研究、日本の心性・精神性、霊性の研究として国学が展開し、本居宣長<sup>35</sup>、平田篤胤<sup>36</sup>などが、それを担っていった。

一方で、儒学的な日本研究は水戸学<sup>37</sup>として発展していく。徳川光圀<sup>38</sup>の時代に初期水戸学ができて『大日本史』を編纂し始め、後期には尊王攘夷思想に展開していく。徳川御三家の中の水戸で、藤田幽谷<sup>39</sup>、会沢正志斎<sup>40</sup>、藤田東湖<sup>41</sup>などによって明治維新の一つの思想的基盤になる尊王攘夷思想が水戸学として整えられていった。

以上が江戸時代の大きな思想的流れであり、そこに蘭学、西洋科学技術が輸入され、明治維新を支えていく思想基盤になっていった。

#### エ 内村鑑三『代表的日本人』で評価される二宮尊徳

内村鑑三<sup>42</sup>は『代表的日本人』の中で、西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮上人の5人を取り上げている。その中でも二宮尊徳について「道徳力を経済改革の要素として重視する、そのような村の再建案が、これまで提出されたことはない。これは信仰

---

<sup>33</sup> 日光東照宮は、栃木県日光市に所在する神社。江戸幕府初代将軍・徳川家康を神格化した東照大権現を祀る。

<sup>34</sup> 寺請制度は、江戸幕府が宗教統制の一環として設けた制度。寺請証文を受けることを民衆に義務付け、キリシタンではないことを寺院に証明させる制度で、檀家制度や寺檀制度とも呼ばれる。

<sup>35</sup> 本居宣長（1730-1801<享保15-享和元>）：江戸時代の国学者・文献学者・医師。

<sup>36</sup> 平田篤胤（1776-1843<安永5-天保14>）：江戸時代後期の国学者・神道家・思想家・医者。

<sup>37</sup> 水戸学は、江戸時代に日本の常陸国水戸藩（現在の茨城県北部）で形成された政治思想の学問で、儒学思想を中心に、国学・史学・神道を結合させたもの。

<sup>38</sup> 徳川光圀（1628-1701<寛永5-元禄13>）：常陸水戸藩の第2代藩主。「水戸黄門」としても知られる。

<sup>39</sup> 藤田幽谷（1774-1826<安永3-文政9>）：江戸時代後期の儒学者・水戸学者・民政家。

<sup>40</sup> 会沢正志斎（1782-1863<天明2-文久3>）：江戸時代後期から末期（幕末）の水戸藩士、水戸学藤田派の学者・思想家。

<sup>41</sup> 藤田東湖（1806-1855<文化3-安政2>）：江戸時代末期の水戸藩士、水戸学藤田派の学者。東湖神社の祭神。

<sup>42</sup> 内村鑑三（1861-1930<万延2-昭和5>）：日本のキリスト教思想家・文学者・伝道者・聖書学者。

の経済的な応用だった。この人にはピューリタンの知があった。むしろ、舶来の『最大多数の最大幸福の思想』にまだ侵されていない真正の日本人があったと言える」「ただ魂のみ至誠であれば、天地をも動かすとの信念があった」「一日の睡眠はわずか二時間」「動機の誠実さ」「誠実にして、はじめて禍を福に変えることができる。術策は役に立たない」「一人の心は、大宇宙にあっては、おそらく小さな存在にすぎないであろう。しかし、その人が誠実でさえあれば、天地も動かさうる」「自然の道を探しだし、それに従わなければならない」「仁術による人心の改良」「永遠の宇宙の法の体得」等、一種の心理主義的な、ピューリタンの心の面に注目して「ピューリタンの知」という独自の観点から取り上げている。

しかし、尊徳は、内村鑑三の見方だけで収まるものではない。至誠だけ、道徳だけで成り立つわけではなく、もっと具体的な実践プログラムを持っていたという、もう一面も指摘しなければならないが、内村鑑三は、そこは基督教の観点から尊徳を評価したということで、より道徳的な側面から尊徳を評価したわけである。

### III 二宮尊徳の生涯とその年譜

尊徳の『報徳訓』は掛け軸にも残っているが、同様に尊徳を描いた絵も掛け軸に残っている。それを見ると尊徳は大男で、ある説では1メートル80センチメートル、六尺くらいあったと言われており、髭面の絵を見ても偉丈夫であったことが窺える。

#### (1) 二宮尊徳の生涯 — 「報徳仕法」の完成

尊徳は1787(天明7)年、小田原藩領の相模国足柄郡栢山村(現小田原市栢山)に生まれた。5歳の時に暴風雨で家を流され、田畑を失う。そして、14歳で父親、16歳で母親を亡くし、兄弟と生き別れになって伯父のところに身を寄せる。

しかし、そういう中でも読書をし、「キ印の金さん」とからかわれながらも、荒れ地を復興し、20歳で生家を再興した。菜種を栽培して収穫し、捨苗を植えて粃一俵を得る。そこから「積小為大」の理に気付く。

尊徳は様々な復興を成功させるが、大きな転換点となったのが、小田原藩の大久保家家老であった服部家の財政再建を果たしたことである。そして、小田原藩主大久保忠真<sup>43</sup>の分家の旗本宇津家の知行所であった下野国桜町領や東郷陣屋の天領、日光山領の仕法を手がけ、復興に成功した。それによって「報徳仕法」を完成させた。

1826(文政9)年には、災害を予測し、災害対策をして奏功した。有名なエピソードがある。ある夏前の日、尊徳は茄子を食べた時に秋茄子のような味がしたので、寒冷状態になってきていると察知し、この夏が冷夏になると予測した。そこで、村人に寒冷に強い稗を植えさせた。その結果、尊徳の予測どおり、その年は冷夏で大凶作になった。しかし、

---

<sup>43</sup> 大久保忠真(1778-1837<安永7-天保8>)：江戸時代後期の譜代大名、老中。相模國小田原藩第7代藩主。



村から餓死者を出すことはなかった。「天保の大飢饉」の際も同様に予測し、対策を立てて窮状を救い、全国で相当の餓死者が出た中で、小田原藩は餓死者を出さなかった。

1856（安政3）年尊徳は、依頼された日光の仕事をしている時、現役のまま亡くなった。

幼少期のエピソードも有名である。尊徳（金次郎）は12歳の時、大人に混じって父親の代わりに村の手伝いを始めた。松の苗木を売っている人に出会い、子守で稼いだ200文の金で200本の松の苗木を買って、それを川の土手に植えた。苗木が大木に育って川の土手を守ってくれると考えたのである。12歳の時から、すでに川の土手を守れば水害を防ぐことができるという、彼独自の発想があったことを示している。

また、父親が亡くなった後、金次郎は家族のために働くが、歩いている時も『大学』を読み続け、手仕事をする傍にも本を開いて、それを見ながら仕事をした。田畑の仕事がない時は堤防の上に立って、川の水の流れの勢いを観察した。水害が起こる時はどうなるのか、川のどこが一番弱いのかを考え、水の流れの当たるところが危ないと知ると、どこを強化しなければならぬかを考えた。このように14～15歳の頃から川を観察していたので、村の人たちからは「変な子どもだ」と言われ、「土手坊主」と呼ばれていた。

あるいは、植えた松苗の手入れをしながら勉強し、杵で米をつき臼の周りを回りながら読書をしていたので「ぐるり一遍」とも呼ばれた。そのように「キ印」「土手坊主」「ぐるり一遍」等、いろいろな渾名あだなをつけられ、変わった子どもだと思われていたのである。

## （2）読書と観察と思索 — 読書による基礎学問と経験による学び

尊徳が大事にしていたことは、「読書百遍義自ずから通ず」と言われるように、『論語』や『大学』を繰り返し読むという勉強法だった。今の若い人たちは、より多くの文献を読んで、より多くの知識を収集する勉強法になっているが、そういう勉強法とは違う、基礎を繰り返し学ぶ勉強法を尊徳は大事にしていた。

その一方で、現実には起こっている現象、例えば、水の流れ等をよく観察した。観察は極めて重要な勉強法で、現実を具体的に知ることになる。例えば、川のどこにどのような流れがあるのか、川端の流れは遅いのに一部だけ流れが速いのはなぜか等、現在の流体力学のようなことを尊徳は経験的に学んだ。

そのように小さい時から、具体的な思考と基礎的な学びの両方を実践した。例えば、伯父の家に引き取られた時に、当時の人々の考え方で「農民に学問は要らない」と言われ、夜に明りを点すことを禁じられた金次郎は、明かりを点す油を得るために荒れ地を耕し、一握りの油菜の種を蒔いて油を得ると、燈油として明かりを点した。あるいは、道端に植え残されて捨てられていた稲の苗を、荒れ地に水を入れて植え付け、豊かな穂を実らせて一俵の米を収穫した。こういうことから、小さな努力をコツコツと積み重ねていけば、いずれは米一俵もの大きな収穫に結び付く、小さなことを積み重ねて大きいことを為す「積小為大」を体験的に把握していく。「積小為大」が貯蓄や富国への道であるという根本原理を、すでに10代で身に付けていたということである。

### (3) 道德心を核とする「報徳仕法」の実践

人が嫌う荒れ地の開墾を一生懸命に行い、検地されるまでは年貢を納めずに済んだので、それによって蓄えた金や米を元に財産を増やし、田畑を買い戻した。そして、その儉約と開拓などの方法でいろいろなところを立て直した。

ところが、いつの世もこのような改革を行うと、保守反動も含めて必ず反対者が出てくる。尊徳に対しても、そのような反対者や、尊徳流のやり方について行けない人がたくさん出てきた。その時に、尊徳は成田山新勝寺に入って21日間の断食修行を行い、新勝寺の不動明王に祈り続ける中で「今まで自分は一生懸命にやってきたけれども、全体を見ることができていなかった」ということに気付く。いろいろな人々がいて、その中で倫理、道德も自分の意見に賛成の人ばかりではない。その中でどうするかという全体を見る視点やバランス感覚をこの時に掴んだと言われている。

そして、この時の経験を基に、地下の冷水を取り除くために「報徳堀」を掘らせ、それによって長い間苦しんだ冷水による被害をなくした。つまり、排水路を作ることで、湿った田畑を改良したわけである。

その他、茨城県の谷田部藩や栃木県の烏山藩、福島県の相馬藩など600余りの村から相談が来るようになり、様々な立て直しに力を尽くした。こうしたものを「報徳仕法」として取りまとめた。

#### ① 服部家の財政立て直し

家老の家の財政立て直しの時に、「贅沢な食事はやめて、飯と汁だけにする」「着物は安く丈夫な木綿にする」「無駄な遊びや付き合いは一切やめる」等、三つの約束をさせた。つまり、質素儉約であり、支出が多過ぎると、いつまで経っても家は健全な財政に行き着かないということである。

5年後に服部家は借金を完済することができ、加えて300両の蓄財ができたので、300両の内の100両を金次郎に謝礼として差し出そうとしたが、金次郎はそれを自分のものとせず、協力してくれた使用人に分け与えたと言われている。

#### ② 「五常講」の構築

さらに、苦しんでいる他の藩士のために「五常講」という仕組みを作った。「五常講」は「仁・義・礼・智・信」の五常からなる。「仁」優しい心掛け、「義」借りたものは必ず返す、「礼」貸してくれた人の恩義に感謝する、「智」借りたお金をきちんと返せるように工夫と努力をする、「信」約束をきちんと守る真心。このような五常の精神性を具体的な行動の倫理規範とした。この五常を心掛けていれば、必ず借金は返済できるし、人間のネットワーク、信頼もできるとしている。つまり、物や金の貸し借りを倫理的にも正しく行う。それを支えていくには道德心がなければ成り立たない。今はこのような道德心が廃れているので、荒廃していく村々を再生するためには、倫理道德を含む思想が必要であることを尊徳は説いた。いわゆる「礼経一致」(礼楽と経済との統合)の先駆である。

### ③ 藩の立て直し

藩を立て直す時に、貧しい農民の暮らしを調べて、次のことを実行した。①10年間は収穫があっても年貢米を据え置く、②壊れた家の修理には無利息で貸し付ける、③優秀な百姓を農民同士の投票で選ばせ、表彰して褒美を与え、モチベーションを上げていき、このようなことを実践して、農民にやる気を出させた。また、収穫して徐々に蓄財できているという実感があるほどモチベーションが上がるので、そういう方法で上手く成し遂げていった。

## IV 二宮尊徳の思想 — 基本理念と体系

### (1) 基本理念 — 「天道」と「人道」の区別を知って「人道」を尽くす

尊徳の基本理念は、「天道」と「人道」の区別を知り、それを踏まえて「人道」を尽くすことである。「天道」は巡り、そこに善悪はない。しかし、「人道」には善悪がある。「人道」は水車のようなもので、半分は水流に従い、半分は水流に逆らう。「人道」は中庸を尊び、譲り合う作為の道である。人間の欲は「天道」だが、欲を節制するのは「人道」である。

### ア 誠の大道 — 「神道」「仏教」「儒教」の習合

日本の文化の中で誠の大道を開いていくためには、神道・儒教・仏教のすべてが必要であり、天台・真言・法華・禅もすべて同じく大道につながる小路の名前であると言っている。尊徳の宗教観は「神儒仏習合」である。究極的には、神道も儒教も仏教も「誠の大道」一つにつながるものであり、入口の相違に過ぎないと言っている。

そして、神儒仏の匙加減は、神道が半分、儒教、仏教は各4分の1と言っている。これに戯れに名を付けて、「神儒仏正味一粒丸」と言う。この丸薬を作るとすれば、その丸薬の半分は神道で、4分の1ずつが儒教と仏教である。そういう丸薬を飲んで、国の病を治し、家の病を治し、社会の病を治していく。そして、今苦しんでいる人たちにそれを服用させて、負債多きを患っている者を返済に導き、資本がなくて苦しんでいる者に資本を得させる、家のない者に家屋を得させる等、貧窮病、驕奢病、放蕩病、無頼病、遊惰病は、皆それを服用して治していくのが、神儒仏三味の力である。このように、神一匙、儒仏半匙ずつと言っている。

また、同時に、神道は「開国道」、儒教は「治国道」、仏教は「治心道」とも言っている。つまり、神道は日本という国を開いた基であり、儒教は国を治め、仏教は心を治める実践と、神道と儒教と仏教の特質を明確に表し、その神儒仏の統合を「神儒仏正味一粒丸」や「三味一粒丸」と呼んで、それを服用すればどんな難病も良くなると、神儒仏の教えの大事さを説いたのである。

## イ 持続可能社会のための四原則 — 「至誠」「勤労」「分度」「推譲」

尊徳は、持続可能な社会にするためには、「至誠」「勤労」「分度」「推譲」の四つの倫理原則が必要だと説いている。

まず、「至誠」が根本であり、そして「人道」を行うが、自然に任せていれば良いというのは大いなる誤りであり、天に任せて「天理」「天道」のままに放置しておくで荒れ地になるので、人間が政治を立て、教えを立て、刑法を定め、礼法を制し、世話を焼く。今と言うケアをしなければ、「人道」は成り立たないと尊徳は言っている。

さらに、「積小為大」として、小さな事を怠らず勤めると「小」が積もって「大」となると説く。富国の根本は多く稼いで少なく使うこと、多くの薪を取って、少なく焚くこと、この収入と支出のバランスが富国の大本だと言っている。今のように様々な投資を行う経済はこういう経済のあり方とは違うが、これはケチや強欲とは違い、節制である。「人道」は自然に反して勤めることによって成り立つ道であるから、貯蓄を尊ぶ。貯蓄は「讓道」であり、「人道」は貯蓄の一つの方法であるとしている。

尊徳の平和論は「推譲」論、つまり譲り合うことである。譲り合うことによって、贈与や共益や献身を果たしていく。この公共道徳である「譲り合うこと」は、尊徳によれば、元々は天照大神が教えた道であり、その天照大神の道のようにすべてを助ける、すべてにあまねく光を届ける、そういう精神が「推譲」であると言っている。

### (2) 体系 — 思想の根幹は、「輪廻」

尊徳の思想の根幹は「輪廻」、すなわち循環・リサイクルである。あらゆるものをうまく循環させる、ことわざで言えば「捨てる神あれば、拾う神あり」だが、そういう天理循環の理を「人道」の中に上手く接続して富み栄えさせる。そういう宇宙開闢から人倫の実践まで、天地人をすべて接続していくことを体系的、系統的に行っている。

#### ①「報徳訓」

尊徳記念館には、酒匂川の氾濫や小田原仕法の展開等、様々なものが紹介されている。興味深いのは、上杉鷹山の改革と尊徳の改革を比較しているところである。財政改革、飢餓対策、殖産政策、人材育成、人口増加策が上杉鷹山の行った対策であり、それに対して、一家再興、財政改革(五常講)、飢饉対策、人材育成、報徳仕法が尊徳の特質である。

その尊徳の「報徳訓」は、「父母の根元は天地令命に在り」から始まり、自分たちの根元は天地から人間の身体になり、子孫の道につながって、環境や農業等になっていくと系統的、体系的に説いている。

#### ②「三才報徳金毛録」

思想の系統的、体系的な表現は「三才報徳金毛録」に、「大極の図」から「一元之論図」「一元体之論図」という順番で行われている。これは陰陽の根幹から現実の富み栄える道まで、すべて系統的、体系的にでき上がっていて、このような構造的思考を通して、

尊徳は計画的に、ある種、数理的に再建の道を説いた。

また、幼き童を諭すための童歌「論幼童之歌十二首」を作っている。これは皆に倫理・道徳を伝えるために作り上げたものである。

おわりに

尊徳は「<sup>おの</sup>自ずからの天地」と、「<sup>みづか</sup>自らの人間」の<sup>ハーモニー</sup>交響を求めた。そして、災害により持続不可能な時代が来ることを見据えながら、持続可能な生き方、暮らし方、仕組みは何かということを探り、具体的な行動をとってきた。

一つは、徹底的な人道主義、独自のヒューマニズムである。さらに、徹底して経験から学ぶ「経験主義」であり、理想主義でも観念論でも朱子学的道徳理念でもない、徹底したプラグマティズムである。実践経験、農業経験と観察に基づいて、自分の世界がどのように成り立っているか、生物がどのように進化してきたかを考え、彼自身で農業をしながら独自の進化論を作り上げていった。

また、徹底した読書、思索、洞察、行動から自分の考えを生み出していった。そして、徹底して現実主義的に足元を見る「脚下照顧」で、自分の手足でできることを考え、実践した。

尊徳は、強靱な未来創造をする意志と、ビジョン、希望、そして人を助けるという公共的な友愛の精神を持ち、そういうものを実現していった人物である。内村鑑三が二宮尊徳を「代表的日本人」の5名の中に入れたのは、非常な慧眼であったと言えよう。今日ふたたびその二宮尊徳の再評価、「金次郎ルネサンス」が必要だと確信する。



報徳二宮神社の二宮尊徳像  
(撮影：鎌田東二)

## 質疑応答

- Q 1 持続可能な社会の実現には思想を「利」につなげることも課題ではないか
- Q 2 二宮尊徳は諸外国の動向に影響を受けたのか
- Q 3 近世の素晴らしい方法論を、なぜ明治時代の日本人は捨ててしまったのか
- Q 4 二宮尊徳の思想や実践は、現代日本でどのように活かされるのか
- Q 5 日本防災基金は準備できるのか、どうすればできるのか

### Q 1 持続可能な社会の実現には思想を「利」につなげることも課題ではないか

江戸幕府の政策により、江戸時代の人口は3,000万人から増減がなく、自給自足経済で循環していた。その江戸時代の循環思想を、現代にいかにか活かしていくかが大きな課題だが、尊徳の場合は「至誠天に通ず」という思想が「利」につながっている。持続可能な社会の実現は、思想をいかに「利」につなげていくかということも大きな課題になるのではないか。

(鎌田)

非常に大きな、応用的な問題でもある。そもそも江戸時代は日本の歴史の中でも特異な時代である。一つは、いわゆる「鎖国」という特殊な状態を守り続けたことが、人口や社会を安定させていたと思われる。もちろん、「鎖国」とは言ってもいくつかの窓口を開いていた。そういう中で、自分の家や村や社会を維持していくための仕組みとして、一つは信仰的な側面を上手く作り上げたこと、権威の確立と修養的な倫理道德の形成である。もう一つは組織を運営していく官僚的な体制を作り上げたことである。加えて、士農工商の身分制度の中で農民を上にしたという制度も重要な意味合いを持っていたと思う。

そのような総合的な政策から、まず、社会を安定させるには、倫理道德の一つにもなる信仰をどう確立するか、権威をどう確立するかが重要となる。その権威の確立が正しかったか、正しくなかったかはいろいろな意見があるし、現代社会にどのように応用できるかを考えても、直接的に今の社会に応用できるかどうかは分からない。ただ、この時代に重要だったのは、権威の確立である。

それまでの戦国時代は下克上で権威が崩壊していた時代であったので、そこから身分制度や社会制度を安定させるためには中心軸を据えることが必要だった。そこで、その中心軸の一つを神仏に置き、新しく徳川家康を神仏にしたわけである。徳川家康は薬師如来の化身であると同時に、新しい東照大権現という神として、戦国時代を救済する働きを持って神界、仏界から送り込まれた化身であり使者、エージェントでありメッセンジャーのような存在という物語を作り上げ、それによって大御所様を神格化し、具体的に東照宮を作り上げて広げていった。これが社会を安定させた権威の再建である。

古代においては、律令体制で伊勢神宮をはじめ、天皇家が権威の源であったが、今度は天照大神に対抗する一つの軸として東を照らす宮を意味する東照宮を再建し、それによって安定した社会制度の中で学問、修養、倫理、そして新たな藩の独自性に任せた開墾、開

拓、さらに、参勤交代に代表される中央と地方を結び付けるネットワークの仕組み等によって、社会のサイクル、リサイクルを上手く回していった。

江戸時代に一番発展したのはリサイクルの運営方法だった。参勤交代という一大社会儀礼システムは社会的なリサイクルであり、それによって、モノ、カネ、ヒトを回していった。観光の原点は江戸時代にあると言っても良い。大名が行列して江戸に行くこと自体が観光の一つの原型であり、それによって東海道五十三次等の宿場町が整備された。つまり、大名、武士たちが戦わずに社会儀礼を盛んに行い、今で言えば、祭りや観光のようなもので社会を豊かにしていった。そういう中で、町民が歌舞伎や芭蕉の「奥の細道」に代表されるような俳句等の文化を栄えさせ、大名から町民、農民に至るまで楽しむような、例えば、農村の神社に舞台をつくって農村歌舞伎を行う等、地域独自の文化的な活性をつくり上げていった。

先頃、徳島の阿波踊りに関して観光政策を巡る問題が起き、全国で話題になった。私は徳島の出身なので、これから先どうなるのかと注目しているが、経済的にもそれまで約120万人も訪れていた観光客が、一説には108万人、もう一説には20数万人まで減ったと言われている。そういう状況を考えると、これから先どうするかを巡って、観光協会や徳島新聞社や実行委員会の間で大きな問題が起こると思われる。

いずれにしても、観光が大きな資源となった原点は江戸時代にあり、東海道五十三次はその一つで、歌川広重の浮世絵にも描かれた。また、伊勢のお蔭参りや熊野詣や四国のお遍路も流行り、安定したのは江戸時代である。その江戸時代がつくり上げてきた文化政策は、現代の地方、地域活性等にも大きなヒントを与えるものがあると思っている。

## Q2 二宮尊徳は諸外国の動向に影響を受けたのか

時代背景を考えると、マウンダー極小期があって飢饉が起き、その頃、アイルランドから多くの人がアメリカに渡った。1840年頃は、イギリスがお茶を買い付けるためにアヘンを売りつけるという事態が起これ、こういう厳しい時代にピューリタンやイギリスの人たちには移住する人もいた。そのように考えた時に、二宮尊徳の生き方、考え方はイギリスの影響を受けていると思われるか。

### (鎌田)

二宮尊徳がイギリスの影響を受けたとは思わないが、小田原藩は徳川の譜代大名で、藩主が大久保彦左衛門の兄の直系であり、江戸と近い関係にあった。したがって、この時代に蘭学が起これ、西洋から様々な新しい文物が入りかけたという世の中の動向は敏感に察知していたと思う。

しかし、根っこは農民の村落共同体をどのように再建するかということにあり、『論語』や『大学』をベースにして、その時代の儒学と、その時代には衰えていたとは言え、日本文化をずっと支えてきた仏教の二つの外来思想を上手く、土台である神道に結び付けながら、諸外国の新しい動向に頼らずに、日本独自の手持ちの駒で取り組んでいくという方法論を展開した。具体的には、農業とそれをどう流通させるのか、どのように農業をシェアするのか、その農業を発展させていく時の倫理・道徳・思想を『論語』や神道、天照

大神の道に置いた。したがって、諸外国の流行をある程度は察知していたと思うが、それとは直接の影響関係を持たずに、独自に自分自身の思想と実践を小田原藩で実現したと思う。

### Q3 近世の素晴らしい方法論を、なぜ明治時代の日本人は捨ててしまったのか

西洋も東洋も能力や文化の高さはあまり変わりがなくて、いろいろなものを生む大きなうねりの中で、全く関係のない西洋と日本で同時期に同じことが起きている例をいくつも経験している。例えば、日本酒には酒柱、杉玉の文化があるが、これは三輪山の御神体の杉玉をもらって飾っている。一方、ウィーンにはホイリゲというワイン酒場文化があるが、その時に印として、同じように杉玉のようなものを飾る。これは、アントワネットの兄が領主だった時に、農民に対して「自分たちが作ったブドウでワインを作ったら自分たちで売っていい」と言ったところから始まっている。同じ頃の江戸時代の中頃、日本では杉玉が発生した。絶対に互いに影響を受けていないはずなのに、人間は同時期に同じようなものを生み出しているのである。

そう考えると、古代・中世・近代と言う時に、我々は西洋近代だけが近代だと思っているが、西洋近代だけではない近代が各地で生まれたとも考えられる。そして、その中でも特殊な近代を生んだのが江戸だと思う。江戸時代は中世でも西洋近代でもない。そのことを国学者や国文学の人は感覚的に知っているので、江戸時代を「近世」と呼ぶ。これはあまり他の国では聞いたことがない。その特殊な「近世」の素晴らしさについて、二宮尊徳の話にも凄いと思うことが多々あるので、今、西洋近代が直面しているいろいろな問題を乗り越える方法論や技を、当時の日本人は持っていたに違いないと想像する。それをなぜ、明治になって、我々は捨ててしまったのか。

#### (鎌田)

近代社会が西洋文明の中だけではなく、世界各地に起こったという観点については、主要な文明国には近代化のプロセスに共通の構造があったと思うので、ある程度賛成である。

その前に、中世社会の成り立ち、特徴を考えたい。中世は中央集権がない時代である。しかし、近代は中央集権的な構造があって、日本の場合は江戸時代に中央に一元化するようなシステムを作って構造転換している。

中世の日本とヨーロッパ社会を見ると、ヨーロッパ社会は11世紀から13世紀にかけて起きた十字軍の運動が近代化を促進させる大きな動力となった。一方、日本では保元の乱、平治の乱、源平の合戦など、太平記が描くような南北朝の動乱の時代を経て、戦国時代になっていく。戦いに次ぐ戦いの時代で、武士たちが中心になって下克上を繰り返していた時代である。そのような時代の中では、宗教的な熱狂と武士の強さの両面が出てくるので、織田信長の比叡山焼き討ちのように、強い宗教勢力を壊そうとしたり、キリシタンを導入して宗教の勢力を弱めようとしたりする政策をとった。そういう政策がもたらした過剰な不安定要素に対して、徳川家康、あるいは家光までの三代くらいの時代の中で、バランスの悪い部分を切り落とし、安定化に向けて一点に集中させるような仕組みを作っ



た。その代表が参勤交代だったと思う。そして、その参勤交代を成り立たせる権威として東照宮のようなものを新たにつくり、藩主の信仰によって藩全体を秩序化していく仕組みを作ったと考える。

そういう近代の中央に一元化していく権利が、日本とヨーロッパで、全く同じではないとしても、共通の構造を持っていた。つまり、安定するためには強い求心力を持って社会を束ねていかなければならないということである。それを支えていくために、近代社会は宗教的な神学、キリスト教の信仰など、教会から離れて、市民社会の中で科学や技術や人権というものが生み出されてきたわけである。

それに対して、日本の場合は、人権思想までは至らないが、農民の力を制度的に上位に置いて、一種の農本主義的な構造を作り上げたことが安定の一つの要因だったと思う。そして、食べるものを石高制にして豊かにし、そういう中から重商主義的な産業の発達を生み出して、日本の資本主義の前身になるものが生み出されてきた。そして、明治時代になると、それを踏まえて日本の文明化を達成した。

つまり、明治維新、文明開化が上手くいったのは、江戸時代に下ごしらえができていたからである。それは学校教育を見れば分かる。世界中で学校教育が近代化のプロセスの中で成功した事例はアジア諸国でも少ないが、日本は寺子屋等、江戸時代からの識字率の高さもあって学校教育は一定の成果を上げた。そして、そういう国民教育の水準が日本的な富国強兵、殖産興業、文明開化路線を実現し、西洋社会に並ぶような国力をつくり上げてきたことは事実だと思う。

しかし、なぜ江戸時代に持っていたそのような力や構造が崩れたのか。一つの原因は、薩長同盟があまりにも徳川を敵視し過ぎたことにあったと思う。それから、社会的な怨念のようなものが、旧弊のものとして取り潰されたためになんか残った。例えば、奥羽列藩同盟の武士たちにどのような生き方があったのか。薩長ら官軍以外の人たちは、教育、宗教、文学、芸術の世界で生きてきて、優れた人材は身を立てたと思われる。したがって、江戸時代から明治時代に大きく社会が激変する時に、ある部分は江戸時代を捨て、ある部分は江戸時代からの下準備の延長線上ででき上がっていった。そのバランスをどの辺りを見るかによって、江戸時代が持っていた力が明治以降も上手く機能した面と、江戸時代のものを上手く活かし切れなかった面があると思う。

その中で、二宮尊徳の影響を受けた人物を取り上げてみると、少なくとも江戸時代に起きた尊徳の「報徳仕法」が明治維新时期以降の殖産興業には大きな後押しになっていることは間違いない。その一人が渋沢栄一である。渋沢栄一は徳川慶喜の家臣だったが、慶喜が失脚した時、敗残者の一人として立身出世など見込めない立場だったところを、大隈重信に引き抜かれて大蔵大臣の下で働き、明治時代の日本型の資本主義をつくり上げ、経済の基盤づくりをしていく重要な人物となる。東京の都市計画等も渋沢栄一が中心になって進められ、その力で日本の民俗学の一つのアチック・ミュージアムという日本の民具・民芸等を集める文化的な動きもできた。したがって、渋沢栄一は尊徳の「報徳仕法」を上手く活かして、江戸時代の終わりに出てきたメソッドを明治維新以降にも活かし得た人材だと言える。

それから、豊田佐吉など「報徳仕法」の支持者は講のようにあり、そういう「報徳仕法」の信奉者たちが、明治時代の西洋型の殖産興業の中で日本的な倫理道徳や報徳思想を基にしながら推進していくという一面もあった。そういう側面に江戸時代の思想や実践がわずかながらも生き延びていた。しかし、大きくは西洋列強社会にどのようにして対抗していくか、伍していくか、植民地支配のようなものの版図を広げていく方向に向かったもので、「報徳思想」が全体を覆うところまで至らなかったのが近代の現実だと思う。

#### Q4 二宮尊徳の思想や実践は、現代日本でどのように活かされるのか

二宮尊徳の思想や実践は、受け継がれた渋沢栄一、豊田佐吉からどのように広がっていったのか。受け継がれたものは現代の日本でさらにどのような形で活かされるのか。

(鎌田)

二宮尊徳の本業は、災害のリアリティがなければ実感できないところがあると思っている。二宮金次郎は「災害の子」であり、災害から学んだ。私たちが今、本当に考えなければならないのは、災害多発時代の中で災害と共に生きていくための持続可能な生き方や社会のあり方である。

安倍政権は経済成長を中心に行っている政権だと思う。そういう意味では、旧来型の近代の大きな資本主義の流れの中にあると思うが、対抗馬の石破元幹事は「防災省をつくらう」と提言している。私はその案に賛成である。防災省は絶対に必要である。防衛省はあるし、憲法改正まで議論が進もうとしていて、次の安倍政権になったら憲法改正を提言するところまで来ているが、私はそれよりも防災をどのようにするかという方が、国防問題以上に重要だと思う。今の気象問題や世界的な農業の不作、漁業も今までよく獲れていたサンマが不漁になる等、生態系の大きな変化の中で基本的な第一次産業の基盤づくりを再構築しなければならない。それについて、防災省や環境省や農水省等と横の連携を持ちながら、総合的にこれからの社会や気象状況の中で生きていく方法、そして、流通のあり方等も作っていかなければならないと思う。

土砂崩れが起きると多数の家屋が停電する。富士山が爆発したら、東海道、関東地方が停電する。停電するとスマホもインターネットも使えない。新幹線も走れない。そのように、電力会社が送電できない事態が起り得ることを想定しなければならない。では、そういう状況の中で二宮尊徳ならどう考えたか。つまり、エネルギーについて、今の仕組みの中でできない時は、各家にソーラーシステム等の自家発電設備や、各戸でなくても100軒単位くらいで共通の電力システムが、緊急時にもあるいは常備的にも必要だということになる。そういう社会のつくり方をしなければ、これから先、どのような変化があっても対応できないのではないか。そういうことを全国規模で考えるのが防災省だと思う。

南海トラフ地震の発生も科学的な予測としてより精密に分かっていることであり、日本海溝からの大規模な東海地震等が起きることも間違いない。そういう時に対する備えをどうするかということが、国防問題よりも基本的に国として準備しなければならない政策ではないかと思っているので、防災省をつくることは、二宮尊徳を活かす一つの道だと思う。それは間違いない予測を持ちながら、それに対する正しい対応を議論しつつ、どう構

築していくかというあり方だと思う。

#### Q5 日本防災基金は準備できるのか、どうすればいいのか

二宮尊徳は地域の村の人たちを教育していけば良かったが、今は中央集権で国家があるので、安倍総理に提案しても、安倍総理が気に入らなければ通る可能性が低い。今回の愛媛、広島、岡山のような大災害が起きた場合、すぐにお金を支給するような日本防災基金を日頃から準備していたら安心ではないかと思い、説明しているが、通りそうにない。どうすれば良いと思われるか。

##### (鎌田)

その案には大賛成であり、通らせる必要があると思う。つまり、「防災省をつくる」と公言している石破氏が当選した方が良いという話である。仮に石破氏が総裁にならなかったとしても、彼が総裁選に立って「防災省をつくろう」と提言したことの意味はあると思うので、国民の声として、もっと大きくその部分の必要度を科学的にも思想的にも説いていく必要があると思う。

二宮尊徳は今で言う無利子ファンドを作った最初の人物の一人である。例えば、病気や災害に遭った人や、お金が無くて「100万円あれば一家を立て直すことができる」という人に、無利子で貸し付けるわけである。ただ、その時に、例えば、100万円を10年間無利子で貸して、年間10万円ずつ返済してもらう場合、10年間で貸し付けた100万円は完済されるが、二宮尊徳の偉大なところとして、次のような考え方が倫理・道徳と結び付いている。それは、貸し付ける時に「100万円をあなたに貸して、それで家を再建して、家族も幸せになった時、もし、あなたが無利子で借り受けた100万円を大切に思い、恩義に感じてくれているなら、あと1年間、あなたの自発的な意思で寄付の形で10万円を出してくれますか」と説くような考え方である。そうすると、100万円借りた人はほとんどが嫌がらずに進んで寄付行為をすると思う。つまり、「報徳思想」という倫理道徳的な思想に基づいて、無利子貸し付けがなされているので、喜んで1年間10万円を奉仕の気持ちで感謝を込めて寄付してくれるということであり、それがまた次の無利子の原型になっていく。そのような無利子貸付の仕組みを、江戸時代の天保の飢饉等の時代に作り上げてきたわけである。

そのように、今の社会の中でも、銀行が利子を取って貸し付けるという社会の仕組みではなく、ある種の講のような友愛のネットワークをきちんと作っていくことが、大きな防災基金の根本において、先行事例となっていくのではないか。その中に二宮尊徳が行ったような方法論や思想性が過去の重要な事例としてあるということ、国会や各種委員会でもきちんと説いていくと、非常に合理的であり、倫理的な利と理を持ったものとして受け入れられる道ができるのではないかと考えている。

そういうことを国民の多くが認識し、必要度を説いて、社会発信していくことが大切になると考えている。

## —表現と学問—

さる6月にわたしはラオスの首都ビエンチャンにあるラオス国立大学で講義をしました。講義タイトルは「アジア共同体と世界市民社会の役割～日本の神仏習合思想の持つ意味と力を考える」というものでした。ラオスの学生との交流のひと時も大変有意義でしたが、何よりもわたしに強い印象を与えたのがメコン川でした。ビエンチャンに到着した6月11日の夜7時すぎ、一人でメコン川を見に行きました。ほとんど真暗でよく見えませんが、目の前に一面に地の果てのような雄大な夜のメコン川が流れているのを感じて思わず涙がこぼれました。ヒマラヤに源流を発し、中国、ミャンマー、ラオス、タイ、カンボジア、ベトナムを流れる大河メコン。ガンジス河同様、ここもまた「母なる大河」ですが、6つもの国々を繋いでいることにも大変深い感銘を受けました。その夜、寝付かれないまま「メコン」と題した詩を書きました。その詩を今年の9月に出す第三詩集『狂天働地』（土曜美術社出版販売）に収めます

(<http://moon21.music.coocan.jp/shinsletter.html>からも読むことができますので、興味がありましたら読んでみてください)。

わたしは常々、学問的探究には三種類があると考えています。

- (一) 道としての学問—人格形成・人間性涵養を目指す。
- (二) 方法としての学問—知性練磨・認識機能亢進・新知見獲得を目指す。
- (三) 表現としての学問—学問的問いを詩や物語や演劇で表現するワザを研く。

この三つです。第一の「道としての学問」とは、孔子の『論語』に「十五にして学に志す」と述べられているように、学問をする人間の志や動機や実存的意味や倫理に基づく人格形成・人間性の深化・涵養・練磨を促す学問のあり方を示すものです。学問は人間形成と不可分だと思っています。第二の「方法としての学問」とは、科学や人文学を含めて、すべて学問には一定の方法論や領域がありますが、そのような知に至る明晰な方法や領域の特定を通してものの見方の更新や概念のイノベーションや新知識の発見と獲得を目指すあり方を示すものです。第三の「表現としての学問」とは、西洋で言えば、プラトンの『対話篇』、アウグスティヌス『告白』、ニーチェの『ツウラトゥストラかく語りき』など、日本で言えば、空海の『三教指帰』、中世の教学・教理問答テキストである法然の『選択本願念仏集』や吉田兼俱『唯一神道妙法要集』、宮沢賢治の『農民芸術概論綱要』など、問いと探究を新しい表現形式の中で探り深めていくあり方を示すものです。「学問」は、例えば「序論（問題設定）・本論（事例実験提示・論証）・結論」の過程を明確に示すような論文形式だけでなく、その思索や問題把握と問題洞察のありようそのものをさまざまな表現形式で表すことができます。今日のような「査読付き学術論文」を優先順位の第一にするような偏った一元的な評価方法では、学問の豊かさや創造性を発現させる

ことはできないとわたしはいつも考えています。

以上のように、「学問」にはこの三種があり、その三種ともに重要な意味と役割とはたらきを持つと考えています。みなさんは、学問をどのように捉えるでしょうか？

## 文献

- 『二宮翁夜話』 児玉幸太訳、中央公論新社、2013年  
『二宮翁夜話』 福住正兄原著、佐々井典彦訳注、致知出版社、2018年  
奈良本辰也『二宮尊徳』 岩波新書、1959年  
守田志郎『二宮尊徳』 朝日新聞社、1975年  
小林惟司『二宮尊徳』 ミネルヴァ書房、2009年  
岩井茂樹『日本人の肖像 二宮金次郎』 角川学芸出版、2010年  
大藤修『人物叢書 二宮尊徳』 吉川弘文館、2015年  
鎌田東二『世直しの思想』 春秋社、2016年  
鎌田東二『悲嘆とケアの神話論—須佐之男と大国主』 春秋社、2023年

2019年7月1日制作

編集・制作

公益財団法人国際高等研究所

IIAS塾「ジュニアセミナー」開催委員会

監

修

池内 了 猪木武徳 佐伯啓思 高橋義人

ISSN 2759-0585



満月に照らされて浮かぶ「ゲート」の胸像  
(国際高等研究所庭園)